

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

『平家物語』諸本に見る人物造型の独自性

氏 名

畠中 愛美

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は『平家物語』諸本がそれぞれ独自に有する本文が、人物造型や場面にどのような影響を及ぼすのかを考察するものである。本文の多様性、流動性こそが『平家物語』という一つの作品に多くの世界観や解釈を与えている点に留意し、それぞれの本が有する独自の本文・表現に注目する。異同があることにより、人物造型や場面にどのような影響を与えるのか、また、編者にどのような意図があったのかを考察し、『平家物語』諸本という群を、個として見る意義を述べる。

第一章では、覚一本巻第五「富士川」における維盛が「ゆらへたり」と描写される点について、他文献や覚一本内の使用例から語義を精査し、維盛像に従来とは異なる解釈が可能ではないかということ論ずる。

第二章では、不備の多さから注目されることの少ない城方本が、本文の取捨選択において、戦乱によって取り残された女性達の描き方に注意を払っていることを異同から述べる。

第三章では、語り本系と読み本系の性格を併せ持つ南都本において、従来源義経の凋落を招く人物として描かれる梶原景時がどのように捉えられているかを確認した上で、二人の確執となった逆櫓論争をどう扱っているかについて述べる。

第四章では、巻第十「海道下」と「千手前」に見られる独自記事や記述から、南都異本編者が平重衡をどのように造型しようとしたのかについて述べる。

第五章では、『源平闘諍録』に源頼朝・梶原景時の人物造型の改変だけでなく、源義経の造型にも配慮が見られることを述べ、本文形成の場が物語世界に大きく影響を及ぼし、一般的に認識されている人物像をも変化させていることを述べる。